ハーレムジェネラル2
THE LEGEND OF HAREM GENERAL 2
立ち読み版
小説 竹内けん
挿絵 かん奈

登場人物紹介

Characters

リュシアン

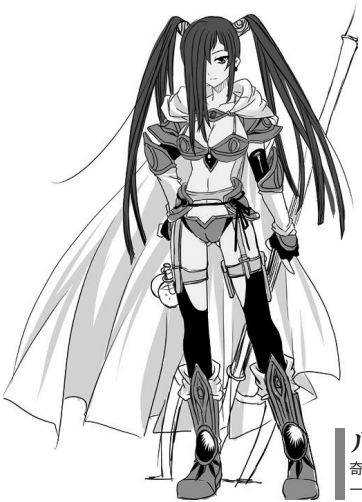
フレイア国王の甥である青年。女性が大好き。
ただ今亡命中の悲劇の王子様。

クリスティーナ

リュシアンの部隊の軍師。文武両道で根は真面目。
今ではすっかりリュシアンの女に。

レイチェル

レジェンダの側近でリュシアンの
討滅に向かう女騎士。
ルキノに対しライバル意識が強い。



ルキノ

奇抜な髪型とビキニ鎧の女武者。
一騎当千と謳われ、実戦能力に定評がある。

マージョリー
軍歴も豊富な大人の女性。
元々はセルベリア王国の将軍だった。

ルシアナ
木材資源豊富なシュルビー公国のお姫様。
清楚で可憐だが少々世間知らず。

オルタンス
リュシアンの元先輩で今は副官を務める。
主に後方支援や事務仕事をこなす。

第一章　いい加減な逃亡者、華麗なる追撃者　009
第二章　サジタリウス城　049
第三章　一期一会　085
第四章　埋伏の毒　122
第五章　死刑囚　163
第六章　強者たちが夢のあと　213

「どうせ、ドモス王国に行ったら、王女さまとお近づきになりたい。上手くコマすために、まずは名前を覚えておこうという思惑なんでしょ」
「そりゃ、まぁ、否定はしないけど……」
「否定しなさいよ！」
思わずキンキンした声を張り上げたクリスティーナは、ソファーに座ったリュシアンに背を向けて、中腰になり、膝に手を置いて、尻を後方に突き出していた。
そして、いきり立つリュシアンの逸物をきっちり己が体内に飲みこんで、クネクネと腰を動かしている。
「いい、わたしたちは国を追われてやむなくドモス王国の世話になりに行くのよ。相手にとってあんたなんて、使い捨ての駒そのものよ。利用価値があるから粗略には扱われないとは思うけど、面倒事が起きたら、躊躇わず切り捨てられるからね」
クリスティーナに釘を刺されたリュシアンは、身悶えながら言い訳する。
「いや、きみたちが激しすぎるから、気を紛らわすために、必死に他のことを考えていたんだよ！」
男が射精を我慢するとき、畳の目を数えるとか、部屋の天井の木目を数えるとかして、別のことを考えるというのはよくある技術だ。
まさか世界最強の軍事大国のお姫様たちも、自分たちが畳の目扱いされていようとは夢

想だにしていないだろう
「わたしも、早くおちんちんを食べたいです……」
リュシアンに背を預け、その右太腿に乗ってM字開脚をしているルキノは切なげに指を咥える。その右側の乳房は、リュシアンの右手によって揉みしだかれている。
武勇に秀でて扱いづらい女として知られているルキノなのだが、本当にリュシアンにはべた惚れである。
「まさに英雄、色を好む、というやつだ」
リュシアンの右肩。ルキノの後ろに膝立ちになっているマージョリーは、リュシアンの頭を両手で抱いて、己が褐色の豊満な乳房に埋めている。
さながら赤ん坊に母乳をやる母親のように、自らの乳房をリュシアンの口に押し込んでいるのだ。
「英雄？　単に女をチンポで骨抜きにするしか能がないこいつが英雄だなんて噴飯ものよ。第一、好色だから英雄なんて理屈でいったら、世の男の大半は英雄でしょ」
ここで言葉を切ったクリスティーナは、軽く黄金の頭髪を掻き上げる。
「でも、なるほど、さすがの貴様も、この状況は現実逃避したくなるほどに気持ちいいというわけか？」
「そ、そりゃ、気持ちいいよ」

なんかヤバイと察したリュシアンが恐る恐る認めると、クリスティーナは莞爾として嗤う。
「わたしもだいぶ、このおちんちんの扱いがわかってきた。くっくっくっ、ここがよいのだろ、ほれ、ほれ」
嗜虐的な顔で嘲笑したクリスティーナは、嬉々として腰を「の」の字に回転させる。
たまらずリュシアンは女体の森で、無様に悶絶する。
「はう、クリスティーナ。激しすぎ、そんなにされたら、で、でちゃうから」
「はぁん、出せばいいじゃない。うん、好きなだけ出しなさい。いまさら、あんたに中出しされたからって、はぁ、怒るような女はここにはいないわ、ふん……」
クリスティーナも、マージョリーも、オルタンスも、ルキノも、いずれもリュシアンの女として、一蓮托生の関係である。
「いや、キミだけではなく、あと三人の女性としなくてはいけないんだよ。そんなにすぐ出していたら、勃たなくなっちゃうでしょ。みんなと楽しむためには、接して漏らさずっていうのが、こういうときの男のマナーなんだよ」
リュシアンの勝手な理屈に、クリスティーナはますます、いきり立つ。
「はは……なるほど、わたしだけイかせてお茶を濁そうとしているわけですか？　でも、お生憎さま、わたしはもうあんたに膣内射精される歓びを知っちゃった女よ。中出ししして

もらわないことには満足できないわ。さぁ、出しなさい。わたしの中に、ほれほれほれ♪」

他の女の体内で出すために、自分の中では我慢される。

それは女として恥辱の扱い以外の何物でもない。負けん気の強いクリスティーナは、意地でも射精させようと、腰使いに力を入れる。

「はぁん、あん、あん、あん、あん、あん……」

グルングルングルングルン！

引き締まった女尻が円回転をして、逸物を振りまわす。

「うおぁぁぁ♪」

必死に射精を我慢するリュシアンの顔を見上げて、乳首を舐めていたオルタンスが嗤う。

「あは、いいわ。リュシアンくんの必死に耐えている表情。ゾクゾクしちゃう。うふふ、乳首もコリコリよ。男の人も乳首が勃起すると、性感帯になるのよね♪　あん、こら、指がお留守になっているわよ。もっと激しくわたしのオマ〇コを掻き混ぜて♪」

痴女の要望に応えて、リュシアンは必死に指を動かす。

クチュクチュクチュ……。

卑猥な水音があたりに響き、飛沫が上がる。

そんな痴女の群れにあって、ルキノはいささか冷静であった。

「しかし、こんなのんびりしていて、いいのでしょうか？」

「はぁん、そんなの、あん……ダメに決まっているでしょ、うん……」
快感に悶えながらもクリスティーナは、キンキンとした金属的な甲高い声で断言した。
「いい……フレイア王国が、わたしたちを見逃す道理が、ありません。あん……必ず追撃部隊を、んっ……派遣するはずです。んん……少しでも距離を稼がねばなりません」
「そのわりにはずいぶんと楽しんでいるみたいね」
怒りながら喘ぐという器用な技を披露する同僚に、オルタンスがいささか呆れ気味に指摘する。
クリスティーナは憤然と吐き捨てる。
「あはっ、そんなの……当然でしょ。こいつには見た目とおちんちんにしか存在価値がないのよ。その唯一のメリットを楽しませてもらわなければ、付いていく意味がないわ。あん、ここいい……新しい快感ポイント発見しちゃった♪」
快感を貪りながらまったく悪びれないクリスティーナの主張に、鼻で溜息をついたオルタンスは肩を竦める。
「あ〜あ、かつて純情だった女の子も、リュシアンくんのちんぽを食べちゃうとこんなあばずれになっちゃうのね」
「あたしも早く閣下のおちんぽに貫かれたいです♪」
切なげに指を舐めていたルキノは、我慢の限界に達したらしく、唾液に濡れた指を股間

に添えて自涜を始めてしまった。
「くっ、らめ、もうらめ、でる、でるでる〜〜〜♪」
かくしてリュシアンは、麗しき美女に囲まれて恥夢に浸っていた。

※

「リュシアンを決して逃がすな！　あやつを取り逃がすことは国家百年の害悪となる！」
いまや国家的な英雄となったリュシアン将軍の出奔。
この情報に接して、フレイア王国の王宮が騒然となったのは言うまでもないだろう。
たたでさえ、前王太子ウルベインの名声は高い。その嫡男であるのに、王位を継げなかったリュシアンに同情する国民感情を無視できず、細心の注意を払ってさまざまな名誉職を与えていたというのに、なぜか西の小覇王エルフィンを撃退するという特大の実績を上げてしまった。
国民の人気が沸騰しているそんな時期に、謀殺しようとして失敗するという最悪の結果だけを残したのだ。
謀殺すると決めたからには中途半端にしていいことはない。地の果てまで追いかけて殺すしかない。
とはいえ、現在のフレイア王国は、東にドモス王国、西にフルセン王国という大敵を抱えている関係から、有能な将軍や兵士は、それぞれ東西の戦線に配置されており、王都に

は前線指揮官は残っていなかった。
やむなく、指揮することになったのは、フレイア国王マドアスの末姫レジェンダである。
「ぐずぐずするな。火種は時とともに大きくなる。これは時間との勝負だ」
王都に残っていた近衛隊などの機動戦力をかき集めて出陣するレジェンダは、まだ十代の姫君である。
ピンク色の豊かな髪をオレンジ色のスカーフで包み、口元には薄い紫色のベールを纏う。ツーピースの水着のような胸当てとパンツ。半透明の紗で作られたズボンはゆったりとしていながら、足首できゅっと締まる。俗にハーレムパンツと呼ばれる形状だ。
まさに典型的な砂漠のお姫様らしい華やかな装いだ。
内心では、父親の軽率さや、不手際を嘆いたりしているのかもしれないが、少なくとも表面上は堂々たるものだ。
母親は元々旅芸人だったという身分の低い出自だが、その活発な人柄を臣民から支持されていた。
このたびが初陣とはいえ、実績を重ねれば、フレイア王国の新たな戦女神として、国民の信奉を集めることだろう。
「姫様、なにも姫様がやる仕事ではないと思いますが……」
苦言を呈したのは、黒い鉄板に赤い縁取りの鎧を身に纏い、鉄頬を付けた女騎士レイチ

ェルである。
こちらはすでに二十代に達しているだろう。
黒い髪を後頭部でキリリと結い上げているさまは、まさに女武人といったところだ。
それもそのはず、母方の祖父には、フレイア王国の重鎮ダングラールを持つという、まさに武の名門の出自。
同性ということもあって、レジェンダとは幼少のころから仲がよく、このたびも初陣の姫君の補佐役を務める。
「わたしがやるしかないのよ！」
厳しい顔をしたレジェンダは肩を怒らせて宣言する。
王族であるリュシアンを追うのに、並の将軍を当てたのでは格で負けてしまう。能力云々の前に兵士たちが気後れしてしまってまともに闘わないだろう。
例えば、レジェンダとレイチェルを比べた場合。
レイチェルのほうが年かさであり、実戦経験もある。しかし、フレイア王家に対する忠誠心が強いがゆえに、彼女ではリュシアンを討てないだろう。
そのため司令官に王族を抜擢する必要があったのだ。
リュシアンの名声に対抗するには、これしかないという、マドアスの苦肉の策であろう。
「責任はわたしが持つ。リュシアンの首級を必ず取ってきなさい」

数々の女を誑かしてきたリュシアンの経験則からいって、この体勢になって最後までやらなかった女はいない。多少の抵抗はあっても、ずるずると最後まで許してしまうものだ。
背後から銀髪を掻き分けて、あらわとなった右の耳元に唇を近づけてリュシアンは囁く。
「どうですか？　少しは暖かくなりましたか」
「は、はい……、で、でも、手が……」
ルシアナが何を言わんとしているのかは明らかだ。
リュシアンの両手は、ルシアナの腋の下を通って、ドレスの上から両の乳房を鷲掴みにしていた。
「おっとこれはいけない。失礼しました」
わざとらしく謝罪したリュシアンだが、手は離さない。
それどころか、優しく、いや大胆に揉みあげる。
「な、なにを……」
「今宵は花の美しさを愛でるに相応しい。古来、花泥棒には罪はないと申します。罪は美しい花にこそある。あなたは月下の花。その美しすぎる容姿がいけないのです」
「そのようなことを言われましても、ああ……」
ドレス越しとはいえ、両の乳房を形が変わるほどに揉みまくられて、全身から力が抜けてしまったのだろう。ルシアナは満足な抵抗ができない。

いくら高貴で気高く、気位が高く、勝気であっても、清らかな乙女である。汚れきったスケコマシ男の前では赤子も同然だ。

「あっ、や、やめてください。……ひ、人を呼びます」

必死に抵抗を試みるルシアナの乳房を揉みしだきながら、リュシアンは耳元で甘く囁く。

「人の出会いは一期一会。わたしたちの出会いは運命と申せましょう」

「運命？」

女という生き物は、なぜか運命という響きが好きだ。

それは浮世離れしたお姫様には、さらに効果絶大だったようで、ルシアナの抵抗は目に見えて落ちた。

「ええ、これは運命です。人は運命には逆らえません。さぁ、運命に身をゆだねてください」

運命という出まかせを連呼しながら、リュシアンは姫君の乳房を揉みまくった。

「ああ、ああ、運命には逆らえない……」

運命に流されることを宿命として生きる姫君にとって意外に、強力なフレーズだったようで、ルシアナの抵抗は止まってしまった。

「そう、運命です。ルシアナ、あなたはぼくと今宵出会う運命にあり、愛し合う運命にあった」

「あなたが……運命の人……ああ、急に胸がドキドキして……」
自我の弱い女にありがちなことだが、相手に告白されると、自分まで相手が好きだったような錯覚に陥る。
まさに今のルシアナの状態だろう。
温室育ちのお姫様は、ここまで強引に言い寄られたことはなかったに違いない。
免疫のないお姫様が混乱しているうちに、リュシアンは紫色のドレスの胸元をはだけさせる。
中から白いハーフカップのブラジャーが出てきた。それも剥き下ろすとポロリと乳白色の乳房が二つ、月下の淡い光に照らしだされた。
「綺麗な乳房です。ぼくは見たことはないのですが、噂に聞く桜の花とはこのような乳首をいうのでしょうね」
リュシアンは両の親指と人差し指で、乳首を抓んで、キュッキュッと刺激してやる。
(あらあら、無垢な顔をしていながら、乳首はもうコリコリ。これは溜まっているな。んー、この雰囲気じゃオナニーとかもしそうにないもんな。やれやれ、こんな美貌の姫様を欲求不満にするなんてもったいない)
純粋な女好きの本能と、欲求不満のお姫様の性欲を解放してやりたいという義務感から、リュシアンは執拗に乳首を扱く。

「あっ、あっ、あっ、そんな、そこをそんなにされたら……変な気分に」
「痛いですか？」
リュシアンの質問に、ルシアナは困惑顔で首を横に振るう。
「痛くはありませんけど……あぁ」
「それじゃ気持ちいいですか？」
「そ、それは……はい」
己が身に起こっていることがよくわからないのか、ルシアナは考え考え頷く。
「ならいいことじゃないですか？　ぜひ思いっきり気持ちよくなってください」
「でも、なんか悪いことをしている気がして……」
「気持ちいいにいいも悪いもありませんよ。さぁ、楽しんでください」
コリコリにシコリ立った乳頭を、リュシアンは執拗に扱き上げる。
「あ、ああ、そんな……ああ♪」
王宮の庭園。人目がないことをいいことに、上半身を裸に剥かれてしまったお姫様は、背後から回った男の手で、乳首を弄り倒されて、熱い吐息を漏らした。
「気持ちいいときには気持ちいいって言ってください」
「え、それは……あ、き、気持ちいいです♪」
混乱しているルシアナは、羞恥に頬を染めながらも、言われるがままに口走ってしまう。

「どこが気持ちいいですか？」
「おっぱい、いや、乳首が気持ちいい。あなたに握られているおっぱいが暖かくて、二つの頂から、甘く痺れるようで……ああ、変、身体が変になってしまう。ああ、こんなのはじめて、……怖い。怖いけど気持ちいい、ああ、もうダメぇぇぇぇぇ〜〜〜」
ピクピクピクピク……。
清純派のお姫様は、汚れた年上の男に、乳房を揉まれまくって絶頂してしまった。
（あらあら、乳首だけでイッちゃった。敏感な身体だこと♪）
ルシアナが惚けている間に、乳房から手を離したリュシアンは、両手を下半身に下ろしてスカートをたくし上げる。
両の細い脚には白いストッキングが穿かれており、太腿の半ばから白いガーターベルトで留めてあった。
白い内腿を撫で上げていく。
途中、我に返ったルシアナは、慌てて両膝を閉じたが事は遅かった。
リュシアンの手が、ショーツ越しに股間を押さえていのだ。
「あっ♪」
布越しとはいえ、異性に女のもっとも大事な部分を捕らえられた姫様は、甘い吐息を漏らしてしまった。

女の膝はいくらぴったり閉じ合わせても、股間近くでは空洞ができてしまう。
リュシアンはそこで指を前後させる。
「ああ、そこ……だめぇ……」
男に背後から抱き締められた姿で、ルシアナは月に向かって悩乱の声を上げる。
(初めての快感に困惑しているわけね。うー、純情だなぁ。それでいてオマ〇コはよく濡れる。ショーツ越しでもヌチャヌチャなのがよくわかるな。こりゃ、中は大洪水だな。見た目は高貴。中身は淫乱か。これは調教しがいがあるな)
基本的にどんな女でも好き嫌いないのがリュシアンである。
「ねぇ、ルシアナ。キミはここを自分で弄ったこともないの？」
「ありません」
ウソをついているようにも見えない。
「それはよくないな。自分の身体のことはよく知っておくべきだと思うよ」
「そ、それは……」
もっともらしい屁理屈に、すでに混乱していたルシアナは、口答えができない。
「ぼくが教えてあげる。だから、このショーツを脱いで欲しいな」
「は、はい……」
まるで夢現をさまよっているかのように、初めての快感に我を失ってしまっている姫様

は頷いた。
そして、リュシアンに背後から抱き締められたまま、いそいそとショーツを下ろしていく。
股間とショーツの股布の間には濃密な粘液が糸を引き、月明かりを浴びてキラキラと輝く。
その淫らな光景に、ルシアナは耳まで赤くなってしまう。
「はい、御苦労さま」
ショーツから右足が抜けたところで、左足を抜くまで我慢できず、リュシアンはルシアナの左右の足を抱え上げる。
「ああ」
リュシアンの股間に座ったルシアナの両足を、M字に開かせる。
べっとりと濡れた銀色の陰毛が張り付いている、股間が月明かりにあらわとなった。
少女の太腿の左右から両手を伸ばしたリュシアンは、肉割れの左右に手をかけると、豪快に割ってしまう。
「あ、そんな……」
女の最深部に月明かりが入ったことで、我に返ったのか、ルシアナは羞恥に身悶えたが、もはや手遅れであった。

惰弱とはいえリュシアンも男、この体勢の女を逃がさないだけの腕力はある。
「さぁ、誰のものでもない。キミのオマ〇コだ。よく見るといいよ」
リュシアンもまた、ルシアナの肩越しに下半身を覗きこむ。
（うは、ちょっとエグイくらい割れちゃったな）
いくら高貴なお姫様然とした顔と雰囲気をしていたとしても、所詮は牝だ。
どんなにお上品な女でも生身の動物という側面から外れることはない。
生殖器があるのは当たり前だ。
ピンク色の媚肉が濡れ光り、ヒクヒクと痙攣しているさまがなんとも生々しい。
（それに立ち昇ってくるこのすげぇ匂い、これは処女臭だな）
濃厚なチーズ臭がリュシアンの鼻腔をくすぐる。
男としては、清楚可憐な乙女ほど、生殖器もまた綺麗と思ってしまいがちだが、現実は逆だ。
性的に無垢な女ほど、自らの性器に触れることは少ないから、洗浄も行き届いていない。
また、処女膜があると、その裏にさまざまな下り物が溜まってしまう。
だから、処女の生殖器はどうしても匂うのだ。
逆に非処女や淫乱な女ほど、普段から男に弄られることを意識しているから、隅々まで洗浄が行き届いていて、匂いはしない。

「っ」
リュシアンが嗅いだ匂いを、ルシアナも嗅いでしまったのだろう。
あまりの腐臭に驚いたようで、慌てて股を閉じようとする。
それを押さえつけながらリュシアンは語る。
「いい匂いです。男は、いやぼくはこの匂いが大好きですよ」
そう嘯いたリュシアンは、右手の人差し指と中指で、女の谷間をなぞり掬い上げた。
それをルシアナの鼻先に翳す。
「っ⁉」
指の狭間に糸引く粘液を目の当たりにしてルシアナは言葉もない。
(うはっ、ネバネバで白濁して泡立っている。まさに本気汁。生まれてから今日まで、溜まりに溜まった性欲の塊って感じた)
「綺麗だね。ルシアナの垂れ流した蜜だ。この蜜が男を誘う。ぼくを誘惑するんだ」
羞恥に悶えるルシアナの反応を存分に堪能してから、リュシアンは指を口元に運び舐める。
「美味しい」
「そ、そんな……」
「ルシアナの身体はどこも甘い。きっとここも甘いんだろうね。こう脳が痺れるくらいに

……」

唾液に濡れた指が再び下半身に下りていき、ルシアナの生殖器を捕らえた。

「ああ……やめて、そんなとこを触らないでください、ああ……」

媚粘膜に触れられたルシアナは電流でも流されたかのように、股間を突き出して、背を反らす。

「ルシアナ。キミは自分のおしっこの出るところを見たことがあるかい？」

「い、いえ……」

半泣き状態のルシアナは首を左右に振るう。

ウソではないだろう。男性と違って女性の尿道口は奥にあるため、意図的に見ようと思わないと見えないため、目にしたことがない女性が多い。

「ここでするんだ。ここに小さな穴があってね、ここからおしっこが出るんだよ」

尿道口など見たことも触ったことも、意識したこともない。そんな女が、尿道口を押さえられ穿られたのだ。

ルシアナは恥ずかしそうに、身悶えながら耐える。

「そして、こっちにあるのがおちんちんを入れる孔だね」

リュシアンは膣孔も割って、月明かりを注いでみる。

半透明の薄い膜が蜘蛛の巣のように張って入り口を塞いでいる。

（うは、わかり易い。しっかりとした処女膜だこと。でも、指の一本くらいは入るかな）
いかな処女膜といえ、完全に塞がっているわけではない。それでは月のモノなどが詰まってしまう。
ほどよくモノが通る程度の孔はあるのだ。
リュシアンは右手の中指を軽く入れてみた。
「はぅ……」
同時に左手で淫核を抓む。
完全な包茎クリトリスだが、包皮の中では芯が堅くなっていた。そこを揉みこんでやる。
「ひぃ、だめ、ひぃ、そ、そこは……だめ、し、痺れる……」
「でも、気持ちいいでしょ」
「は、はい……でも、頭の中が真っ白になってしまう。ああ、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい♪」
清純派のお姫様は、ろくでなしの男の魔の手にかかり、再度絶頂した。
「あああ〜〜〜」
ぴゅっ〜！
弄られている膣孔と淫核の間から、熱いゆばりがさながら小さな蛇のように跳ね上がった。

同時にリュシアンに付いて、軽々と祖国を捨てられるような生き方にも羨望を持っているようだ。

さながら、地を駆ける獣が、空を翔ける鳥に憧れるように。

「キミは真面目すぎるよ」

「不器用な性分だとは理解しています。しかし、フレイア王国と栄枯盛衰を共にするのが、あたしの、そして一族の矜持です」

感極まったレイチェルは表情を隠すように下を向き、頭をリュシアンの胸に押し付けた。

ポニーテールを鼻先に感じながらリュシアンは慰めの言葉を優しくかける。

「キミはまだ若い。もっと視野を広く持つべきだ。騎士がすべてではない。女としての幸せを求めたって、だれも責めはしないよ」

一族が全滅することを望む家長がいるとは思えない。

彼女の祖父であり、マドアスの側近であるダングラール将軍あたりは、一族の者はフレイア王国に殉じるべきと公言しているだろうが、内心ではレイチェルのような若い者たちには生きて欲しいと思っているはずだ。

「女の幸せなど、とうの昔に諦めています。あたしは騎士として戦い、騎士として死ぬ」

頑なに己が生き方を思い定めている少女に向かって、リュシアンは優しく命じる。

「レイチェル、顔を上げて」

「はい」
レイチェルは素直に顔を上げた。
そこにリュシアンは首を伸ばし、唇を重ねる。
「っ！」
目を見開いたレイチェルは、反射的に離れる。
「なにを……また、あたしを騙し、恥を掻かせようというのですか？」
「キミが女としての生き方を捨て、騎士として殉じるという決意は立派だと思う。ぼくは否定しないよ。でも、女としての歓びをまったく楽しまない、というのはもったいないと思うな」
リュシアンに諭されたレイチェルは、騙されるものか、と言いたげに鞭の柄を両手で強く抱きしめながら、一歩後ろに下がる。
「今度は騙されません。なにを言われても、その縛めは解きませんよ」
「わかっている。そんなことは望んじゃいないよ」
リュシアンは接吻の余韻を楽しむように軽く舌舐めずりをしてから、薄く笑う。
ビク！
女には危険な男に騙されたい、という願望を持つタイプがいる。
レイチェルは、リュシアンが稀代の女ったらしだということを、百も承知していた。だ

から、自分は絶対に騙されない、と自らを言い聞かせているようだが、破滅的な恋に惹かれている自分を抑えるのに必死だ、というのが、手に取るように見て取れる。
「さぁ、悪い男に拷問を続けるといいよ。レジェンダにそう命じられたんだろ」
「あたしに殿下を鞭打てと言うのですか？」
鞭の柄を握り締めたレイチェルは、プルプルと顔を横に振るう。
なぜか追い詰められたような顔をしている乙女に、捕らわれの男はニヤリと笑う。
「拷問は鞭打ちだけではないでしょ？」
「……」
戸惑った顔をするレイチェルに、悪魔の色男は甘く囁く。
「例えば性的虐待」
「性的虐待」
「そう。ぼくはなにもできない。レイチェルはぼくを好きなようにできるんだ」
まるでリュシアンの言葉がハンマーで、レイチェルは頭を強打されたかのようによろめく。
「殿下を、あのリュシアン殿下を、好きできる……ごくん」
とんでもない状況に気づいたというように愕然としたレイチェルは、ついで喉を鳴らした。それから慌てて、左右を窺う。

「安心しなさい。ここにはレイチェルとぼくしかいない」
吊るし上げられている男の甘い言葉に、純情な女騎士は鼻息を荒くする。
「殿下は逃げられない。あの夜の砂漠のように逃げることはない。殿下をあたしだけのものにできる」
鞭の柄を胸の前で強く握り締めたレイチェルは、さながら高熱でもあるかのようにフラフラとまた近づいてきた。
「殿下を好きにしていいのですね」
「ああ、煮て食べるも焼いて食べるのもキミの自由だ。レイチェル、ぼくはキミのものだ」
ゾク！
背筋に電流でも走ったように震えたレイチェルは、恐る恐る両腕を伸ばし、リュシアンの頭を抱えた。それから背伸びをして顔を近づけてきた。
「殿下の唇を奪うことも……」
「ああ、レイチェルの思うがままだ」
恍惚とした表情を浮かべたレイチェルは、今度は自分から唇を重ねた。
「う、うん……ふむ……」
唇を合わせるだけでは我慢できないのだろう。興奮したレイチェルは、夢中になって唇を擦りあわせてくる。

さらにレイチェルは舌を出し、リュシアンの唇を舐めまわし、狭間へと舌を押し入れてくる。
それに応えてリュシアンも唇を開けて迎え入れた。
レイチェルの舌が貪るようにリュシアンの口内に入ってきて、そして、舌を搦め捕る。
ピチャピチャピチャ……。
情熱的な接吻で男女の顎まで濡れる。
「ふぅー、ふぅー、ふぅー」
荒い鼻息をして接吻に酔いしれているレイチェルの手から力が抜けて、リュシアンの後頭部からポトリと鞭が落ちる。
堕ちた。まさに純情な女騎士は稀代の色男の術中に堕ちてしまったのだ。
長い接吻を終えて、唇を離したレイチェルは、火照った顔に、トロリと蕩けた眼差しで宣言する。
「レジェンダ様から殿下を痛めつけるように命じられています。だから、仕方なくするんです」
「ああ、受けるよ。ぼくの可愛いレイチェル♪」
ゾク！
言葉だけでイってしまっているのではないか、と思えるほどにビクビクと震えながら、

レイチェルは反論する。

「あたしは殿下の女ではありません。まだ、やられたことはないんですから……。そういう誤解を招くことは言わないでください。まったく、殿下が女とみればだれかれ構わず口説くお方だということは、あたしだって承知しているんです。あたしは殿下が玩具にしてきた女とは違うんです。そう違うんです。あたしが殿下を玩具にするのですから♪」

幾度となく生唾を飲みながら、レイチェルは必死に自分に言い聞かせる。

鼻息を荒くしながら、リュシアンの上体を裸に剥いていく。

（まったく可愛いな）

レイチェルから見ると、リュシアンは完全に理想の王子様なのだろう。

それを好きにできるという状況を手にして、完全に舞い上がってしまい、パニックを起こしている。

（たまにはこういうシチュエーションもありだな）

敵の捕虜となり、死刑宣告までされているのに、リュシアンのほうは状況を楽しんでいる。

「ああ、これが殿下の胸板。こんなに華奢だったのですね……。それでいてロックス将軍を手ずから討ち取った勇者♪　あたしには計り知れないお方です」

我を忘れて興奮した表情のレイチェルは、男の胸板を撫で回していたが、やがて腋の下

に顔を突っ込み、クンクンと鼻を鳴らして匂いを嗅ぐ。
「ああ、殿下の匂い……たまりません♪」
匂いを嗅ぐだけでは飽き足らず、レイチェルはペロペロと舐める。
「こらこら、くすぐったい」
「我慢してください。これは拷問なのですから……ああ♪」
存分に男の腋の下の味を楽しんだ処女娘は、発情しきった顔を上げて宣言する。
「ここにいるかぎり殿下はあたしのもの。だから、全身を舐めまわします。すべてあたし色に染めます。今までたくさんの女性を泣かせてきたいけない殿下を、あたしの舌で清めて差し上げます」
さながら犬のマーキングと同じような心理だろうか。
興奮しきっているレイチェルは、さらにリュシアンの乳首をペロペロと舐める。
「あっ」
思わず喘ぎ声を漏らしてしまったリュシアンを見上げて、レイチェルは嬉しそうに目を細める。
「やはり男性も乳首を舐められると感じるのですね」
「ああ……」
頷くリュシアンを前に、レイチェルは歓喜する。

「男なのに、女に乳首を舐められて、喘ぐ……。リュシアン殿下が啼かせた女は数えきれぬでしょう。女としての歓びにむせび啼き、身も心も堕ちた女は星の数ほどいる。しかし、殿下を一方的に翻弄した女はいないはず」

「くぅ、ああ……」

レイチェルの夢を壊してはいけないと思い、リュシアンは黙っていたが、女たちとの乱交を常としているリュシアンである。逸物の順番待ちをしている女たちが、暇にあかして男の乳首などを舐めてくるのはよくあることだ。

そんなことを露ほども想像できない処女娘は、自分が初めてリュシアンを弄んでいるのだ、という幻想に酔いながら、夢中になって奉仕してくる。

男の左右の乳首を存分に弄んでいたレイチェルは、そのまましゃがんでいき、男の臍からさらに下腹部へと顔を近づけた。

「っ！」

ズボン越しに膨らんでいる部分を見つけて、軽く目を見張り、ついで恐る恐る手を伸ばすとズボン越しに中身を確かめるように撫で回して、恍惚の溜息を付く。

「ああ、あたしなんかの前で、こんなに大きくなってくれるだなんて……」

「それは大きくなるよ。レイチェルみたいな美人と一緒にいるんだ」

「び、美人だなんて、あたしなんて、筋肉ばかりで、あぁ……お世辞だとわかっているの

に、嬉しい♪」
テントを張る男の股間を前に、レイチェルは嬉しそうに身悶える。
「はぁ、はぁ、はぁ……殿下のお大事がこの中に」
目を見開き、瞳孔を小さくし、荒い息をするレイチェルは完全に危ない女である。
「レイチェル、少し落ち着いて」
「落ち着くなんて無理です。ああ、あたしなんかが、殿下のお大事を拝見していいのでしょうか？　ああ、でも見たい。殿下の逞しいおちんちんを生で拝見したい。ああ、もう我慢できません。失礼します」
布越しに逸物を撫で回して、一人悶々としていたレイチェルは、やがて我慢の限界に達したらしく、ズボンと下着を引きずり下ろす。
ブルン！
「っ!?」
当然のように飛び出した逸物に鼻先をぶつけて、レイチェルは驚き、ふらつきながらも寄り目になり、かぶりつくように覗きこむ。
「こ、これがお大事。男性器というものですか？　は、はじめて見ました」
（そういえば、前回、会ったときは、おちんちんを出さなかったっけ）
クリスティーナ、オルタンス、ルキノ、マージョリーといった痴女たちの総攻撃を受け

て、睾丸が空っぽの状態のときに出会ったのだ。
　そのため指マンだけで誤魔化したのを覚えている。
「な、なんというか、変な形ですね。へ、変だなんて、失礼しました。殿下のお大事。世の女たちはこれを入れられると極楽往生するという。金銀財宝よりはるかに貴重なものだというのに」
　完全にてんぱって、訳がわからないことをまくしたてるレイチェルを見下ろしつつ、さすがのリュシアンも苦笑するしかない。
（そこまでたいしたものではないと思うんだけどなぁ）
　レイチェルのほうは、左右から下から、ためつすがめつに逸物を観察している。
「見ているだけでなく、触ったらどうだい？」
「さ、触る。あたしが殿下のお大事に、そんな恐れ多い」
「いや、別に女性は普通に触るもんだよ。そうだな、ルキノなんかも好きだよ」
　リュシアンは意図的に、レイチェルが対抗意識を持っている女の名前を挙げてやった。
　ピキン！
「っ！」
　予想通りレイチェルの顔つきが変わった。
「そうですね。忘れていました。殿下のお大事にはすでに大勢の女性が取りついていたこ

とを。そう、あのルキノまで」
　ルキノには負けられない。そんな敵愾心に背を押されたレイチェルは、震える両手で恐る恐る逸物を包んでいく。
「ああ、温かい」
　グイっと強く逸物を握り締めた。それから、ニギニギと握り心地を確認する。
　さらには尿道口に鼻を近づけて、クンクンと匂いを嗅ぐ。
「あぁ、いい匂い。弾力があって、それでいてガチガチ。これが世の女たちを誑かす、最強最悪の兵器……ごくり」
「大袈裟だな」
「いえ、フレイアの女は、これには勝てません」
　逸物を宝物のように押し戴いたレイチェルは、愛しげに頬擦りをする。
「あぁ、このお大事を、ルキノのやつも食べたのでしょ？」
「……まぁ、ルキノはぼくの女だからね」
「あのむっつりした女が、どんな表情でこのお大事をいただいていたのか、まったく想像が付きません」
　普段の表情から、欲情して逸物にかぶりついている表情が想像できない、という意味なら、レイチェルも負けず劣らずである。

「あたしは、ルキノよりも上手に奉仕します。あの女には負けません」
（ルキノのやつも、えらいのに見込まれてしまったな）
ルキノは相手にしていないようだが、レイチェルは一方的に目の仇にして、ライバル視しているようだ。
「で、では、そろそろ……ご、ご奉仕させていただきます」
「ああ、お願い」
「では、御免！」
大口を開けたレイチェルは、勢いを付けてカプリと逸物を頭から飲みこんだ。
（うわ、豪快にいったな。さすが騎士。思い切りがいい）
驚くリュシアンの前で、レイチェルは両手で握り締めた逸物を、啜り上げながら頭を上下させる。
じゅるじゅる……。
（お、これは初めてにしてはなかなか上手。テクニックのなさを勢いでカバーしているという感じだ）
しばし無心で逸物を啜り上げていたレイチェルだが、やがて満足したのか、いったん逸物を口から出して、顎に滴る涎を拭う。
「はぁ～……さすがそう簡単には出してくれませんね」

「キミの頑張りに期待するよ」
「お任せください。あたしはルキノよりも優れているということを証明してみせます」
リュシアンの挑発に、頷いたレイチェルは、唾液に濡れ光る逸物を両手で握り裏筋を舐め下ろしていった。
そして、肉袋を左右から掴む。
「ここは柔らかいのですね。さすが男の急所。どんな英雄豪傑でも、ここを責められては敗北するという。あぁ、リュシアン殿下の睾丸が、今あたしの手の中に……♪」
左右の掌で、それぞれ睾丸を捕まえると、愛しげにマッサージしてくる。
(うお、初めておちんちんに触れたんだろうに、マニアックな責めをしてくるな)
睾丸マッサージを受けて、リュシアンは身悶えた。
そんなさまに自信を持ったのか、レイチェルは楽しげに微笑する。
「あは、お尻の孔が見えます。殿下にもあるんですね」
「そりゃあるけど……」
「素敵です♪」
リュシアンの股の間に潜り込んだレイチェルは、なんとお尻の孔を舐め始めた。
「え、お尻の孔に素敵もなにも、って、うは！　ちょ、ちょっと、そこ、汚いよ」
「ああ、殿下に汚いところなどありません」

レイチェルは恍惚とした様子で、リュシアンのアナルを舐める。
「あは、ここがいいんですか？　お尻の孔、舐められて恥ずかしいでしょ。うふふ、殿下が感じてくださっている。うふふふふふ♪」
（あ、こいつ、男を好きにできる状況を前にして、変なスイッチ入ったなこれは……）
根が真面目な女ほど、堕ちると止め処がない、という俗説はよく聞くが、まさにそんな状態なのだろう。
縛られて動けない男を一方的に弄べるという状況で遊ぶうちに、エスっ気が育ち始めたようである。
しばし、肛門を舐めながら、肉袋を揉んでいたレイチェルだが、不意に離れて叫んだ。
「ああ、もうたまらない！」
リュシアンの前にしゃがみこんだレイチェルは左手で自らの乳房を揉みながら、右手をミニスカートの中に入れる。
（うわ、オナニー始めちゃった）
驚くリュシアンに見守られながら、レイチェルは荒い吐息を逸物に浴びせつつ訴える。
「ああ、恥ずかしい。殿下の前でこのような痴態を、ですが、やめられない。やめられないのです。あの夜、はぁ……はぁ……はぁ……殿下のせいで、あたしの身体はおかしくなってしまいました。殿下の顔を思い出すだけで、顔が火照り、身体が火照り、そして、子

宮が火照るんです」
つまりオナニー癖に目覚めてしまった、ということだろう。
（まぁ、年頃の女の子だし、オナニーぐらいするのは普通だと思うけどな）
女に性欲があることなど、リュシアンは当たり前だと思っている。
しかし、レイチェルは違うようだ。最近、覚えてしまったオナニーをやめられない罪悪感に苛まれている。
もっとも男に見られながら自涜することに、被虐の歓びを覚えているようである。身体をまさぐる両手はそのままに、逸物にむしゃぶりついてきた。
「うむ、ふむ、うむ……」
ポタポタポタポタ……。
逸物を咥えながらのオナニーに興奮し、股の間から床に、止め処なく雫が滴っている。
「ああ、疼く……疼いて仕方がない。この疼きを鎮めるにはどうしたら？　どうしたら、よろしいですか」
「慰めてあげたいけどね。ぼくの手はほら」
カシャカシャ！
リュシアンは天井から吊るされている両手を揺らして、鎖を鳴らしてみせる。
「ああ……って、ダメです。その縛めは解きません。閣下が逃げますから」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!